

新出百済仏教関係資料の再照明

——シンポジウム「仏教と上代文学」を終えて——

一 シンポジウムを終えて

二〇〇九年度の上代文学会シンポジウムは、十一月十四日（土）午後二時より、雨上がりの蒼天の下、日本女子大学で予定どおり開催された。開催趣旨は以下の通りである。

平安遷都後の文学に仏教が色濃く投影されるに對して、仏教の上代文学への影響は微弱であるとされてきた。古事記はその伝来さえ語らず、万葉集にも思想的に仏教の影響下にあるとされる歌は数えるほどしかないとされている。ところが、仏教伝来から氏族仏教を経て国家仏教として大きく開花していく時代の中で、記紀万葉風土記は成立しているのである。日本書紀には經典名も記載され、僧尼の固有名も百人を超えて記

瀬 間 正 之

載されることも考慮すれば、文字情報・潤色資料としての仏典に留まらず、上代文学にとっての仏教を再確認する必要がある。

「仏教は上代文学に何をもたらしたか（もたらさなかったのか）」を問う前提として、最新の上代仏教史研究の成果が必須であることは言うまでもない。今回のシンポジウムでは上代文学の背景として仏教を取り上げて、議論をいっそう深める機会としたい。

このような趣旨で、古代史研究者の中でもとりわけ仏教に造詣が深いお三方に講師を依頼した。

最初の曾根正人氏の「上代『仏教』の実態と研究者の『仏教』は、奈良末期の仏教界の經典解釈力の貧困を具体例を挙げて示された。注釈者であつてもしかり、仮に上

代文学文献に仏教的要素が垣間見えるとしても、それが仏教教理・経典を理解しての上か否かは疑問視せざるを得ないことが明確化した。

これと関連して、最後の増尾伸一郎氏「上代文学と東アジアの漢訳仏典」は、将来した偽経経典、新羅諸師章疏類等を挙げられて、それらに含まれる外典、及び道教的要素を指摘された。

両氏の指摘から、未熟な教理研究と多くの不純物を含む奈良仏教の姿が浮かび上がった。したがって、上代文学に現れた「仏教」は、仏教というよりも、仏教的要素を含んだ何か他のものであったと言えるかも知れない。

総論的な両氏に対して、北條勝貴氏の「神身離脱の内的世界―救済論としての神仏習合―」は、江南で創出された神身離脱を高僧伝・六朝志怪小説に見られる説話から検証し、我が国にどのような受容されたかを自然観の問題から捉えようとされたもので、精神世界を取り挙げながらも具体性をもって、今回の趣旨に各論的にお答えいただいたものであった。

休憩後の討論も活発に行われたが、その中で新羅の経典理解の水準が一つの論点になった。確かに、元暁（六一七―六八六年）の教理理解の水準は高く、日本仏教に与えた影響も少なくない。ところが、慧超（七〇四―七八七年）

となると、『往五天竺国伝』を見る限り、在唐経験もありながらその文章も熟達しておらず、漢文としては誤用の目立つものである^①。

最後に、百済仏教をどう捉えるかも問題となった。今回は、この問題について、近年明らかになった百済資料（木簡・金石文・仏典）を具体的に紹介することでシンポジウムの結びとしたい。

二 百済木簡と仏教

今世紀に入り、続々と発見され始めた韓国出土木簡は、二〇〇九年時点で、数百点が確認されているが、その中、三国時代の百済の故地から出土したものは数十点程度である。仏教の見地から注目されるのは、扶余・陵山里寺址から出土した三〇四号・三〇五号木簡の二点である。まず三〇五号木簡から取り挙げる。

〔三〇五号木簡〕

・「慧暈師呪」

・「慧暈呻於」

・「宿世結業同生一處是

・「宿世結業同生一處是

非相問上拜白事

」 非相問上拜白来

上段は国立扶余博物館『百済木簡』^②の釈文、下段は早稲田大学朝鮮文化研究所・国立伽耶文化財研究所『咸安城山

山城木簡^③の釈文である。上段の「宛」、下段の「於」は、国立昌原文化財研究所「韓国古代木簡二〇〇四」及び「韓国古代木簡二〇〇六」では「前」と訓まれていた。また、最新の国立扶余博物館・国立伽耶文化財研究所の釈^④では、

・「慧暈師宛」

・「宿世結業同生一處是

非相問上拜白來」

と釈読されている。それぞれの釈文で「前」「宛」「於」とされる字は、写真では「於」字に近く、赤外線写真では「前」字に近いようにも見える。二〇〇八年一月二〇日、国立扶余博物館に於いて実見したが、「充」の異体字「死」に見えなくもないが、上部は「上」（ナベブタ）でなく、「上」（ソイチ）に見える。

「前」であれば、藤原宮木簡に見られる「宛先+前」の用法と繋がり、「於」であれば、百濟語の語順に漢字を配列した可能性が見え、「宛」であれば、我が国の国字と共通することになる。裏面は、今かりに「宿世業を結び、同一一處に生まれむ（生まる）。是非相ひ問ひ、上拜して白し来る（事を白す）。」と訓んでおきたい。「前世の因縁でこうして共にここで生を受けた」と見るか「前世からの因縁で来世も共に同じ場所で生まれよう」という誓約の言葉

と見るかによって、それ以下の解釈も異なってくる。

ともあれ、「慧暈師」も僧名であると考えられ、「宿世」「結業」も仏典類用語であり、「同生一處」も、「大正新脩大藏經」に一七例用いられる語である。主な用例は以下の通り。

大寶積經278c 律儀菩薩、常與其兄同生一處。

大智度論290b 須涅多羅作是念「我不應與弟子同生一處。

……」

阿毘曇毘婆沙論015b 問曰「頗有二聖人、同生一處。

……」

妙法蓮華經文句012b 我見金地國王死。夫人投火聚。願

同生一處。言已命終。

法苑珠林677c 阿母已發願求見建。建不久當命終。即共

建同生一處。（出冥祥記）

この木簡の形状は、特殊（二・八×三・一×一・二）で、厚みがある。四字句構成と言い、どういう場面で使用されたのか興味をそそられる。

【三〇四号木簡】

・「四月七日 寶慧寺 智眞^{英芳}×

慧^{乗方}×

僧名と見られる「智眞（寔）」「乘（慧）×」に釈文の揺

れがあるが、「四月七日 寶慧寺」には揺れがない。裏面には「送塩二石」とあるが異筆と見られる。

この「寶慧寺」という寺名は、東アジアの文字資料中、初見であることが重大な発見となった。即ち、従来『大乘四論玄義記』の撰者慧均は、興皇寺法朗（五〇七〜五八一）の弟子で、吉藏の同門であり、唐人と見なされていたところが、『大乘四論玄義記』中に「今時此間寶慧淵師」（現在この寶慧寺の淵師）と見える点から、崔鉉植氏は次のように述べられた。

この木簡は状況から見て、百濟王陵の陵寺であった陵山里寺刹で開催された四月八日の儀礼に参与した僧侶を確認するためのものと推定されている。特にこの木簡の裏面には塩を送ったという記録があることから見て、陵山里寺刹と寶慧寺は比較的近い地域にあったと見られる。すなわち、寶慧寺は百濟の首都であった扶余から遠く離れない地域にあった寺刹であったと考えられるのである。（拙訳）

この木簡の発見により、慧均は百濟人であり、『大乘四論玄義記』は、現存最古の百濟文献である可能性がますます高まった。

さて、その識語も注目される。「顯慶三年、歲次戊午年十二月六日、興輪寺学問僧法安、爲大皇帝及内殿故敬

奉義章一也」。顯慶三年は、六五八年に当たり、興輪寺は新羅の都、慶州の寺と見て良いだろう。『三国遺事』にもその名が見え、二〇〇九年三月、慶州工業高校の構内排水路から、「王興」の二文字を刻んだ筒瓦破片が発見され、国立慶州博物館は、この二文字から本来の銘文を「大王興輪寺」と推定し、現存興輪寺の北にある慶州工業高校一帯が興輪寺跡である可能性を高める考古学的証拠であると発表した。

ここで注目されるのが「学問僧+人名」の表記である。

この語は、日本書紀・続日本紀・東大寺要録・延喜式・性靈集・南天竺婆羅門僧正碑・唐大和上東征伝・中論疏記（安澄）・戒律傳來記（豊安）・入唐求法巡礼行記など本邦著作には用いられるが、国外の文献では、唯一、「貞元二十年、遣使來朝、留學生橘逸勢、學問僧空海」の例が旧唐書・新唐書とこれを引く類書に見られるのみである。確かに百濟・新羅の同時代史料が限定されることもあるが、唐書においても日本僧にのみ「学問僧」が冠されるということは、「学問僧+人名」という呼び名は本邦の僧に限定される可能性が高い。実際『大乘四論玄義記』が大陸・半島には遺されず、日本のみに伝えられていたことも興味深い事実である。

三 王興寺「青銅製舍利函前面銘」

白馬江を隔て扶蘇山城の対岸にある王興寺は、二〇〇七年一月の発掘時点からその伽藍配置など大きな話題を提供したが、出土品の一つ青銅製舍利函の前面には以下の銘が刻まれていた（『百済王興寺』国立扶余博物館・国立扶余文化財研究所、二〇〇八年一月の模刻に拠る）。

丁酉年二月十五日、百済王昌、為亡王子立刹、本舍利二枚葬時、神化為三。

漢文風に訓読すれば以下の通りである。

丁酉57年二月十五日（涅槃会）、百済王・昌、亡き王子の為に刹を立つ。本舍利二枚、葬る。時に神化して三と為る。

しかし、（百済語が倭語と同じ語順であるという前提に立って）倭文的に訓めば、末尾は「本舍利二枚を葬る時、神化して三と為る」とすることも可能である。ともあれ、舍利の奇跡を記述したものである。『広弘明集』卷第十七「仏徳篇第三之三」や、『法苑珠林』卷第四十「舍利篇第三十七」感応縁に舍利の奇跡の話は多く見られるが、舍利が神化して三枚になる話は以下に求められる。

『法苑珠林』卷第十二・結集部第十五・感應縁「齊文宣帝時得佛牙至」380b

先師又於_レ于闐_レ得_レ舍利十五枚_一。處處分布。枳園禪靈起_レ刹之時。悉皆得_レ分。以_レ一枚_二送_二與文宣_一。文宣時東宮。即取_レ淨水_二試_二其眞僞_一。浮_二在鉢中_一。俄頃不見。道俗數十。精心撿覓。永不能_レ得。内外周迴莫_レ不_二疲怠_一。文宣方竭_レ誠懺悔。俄爾之間。復於_二向處_一忽見_レ在_レ地。光高尺餘。色彩炳曜。衆咸共覩莫_レ不_二讚美_一。先師所_レ餘二枚。各一銀函封題_二府籙_一。後更撿視。與_レ函俱失。垂_三三載_二後開取_二佛牙_一。忽於_二本篋_一還復得_レ之。先有_二二枚_一而長。獲_レ一凡成_二三枚_一。同在_二一處_一。但先銀函猶_レ遂失_レ焉。故神化不_レ可_二測度_一矣。

『法苑珠林』は、六六八年、唐・道世撰であるが、この話は「右前諸事出_二漢法内傳并雜史高僧傳等錄_一」とあり、六世紀にも伝えられていた可能性は残される。

こうした舍利の奇跡は、次項の弥勒寺「金製舍利奉安記」にも見られる。

四 弥勒寺「金製舍利奉安記」

二〇〇九年一月、益山・弥勒寺西塔の解体に伴って一大発見があった。『三国遺事』に拠れば、善花公主の発願で建立されたという弥勒寺から、「金製舍利奉安記」が発見されたのである。これについては、拙稿「百済弥勒寺「金製舍利奉安記」」で解釈を試みたが、出土速報的性格に終

始した嫌いがあり、拙速の誹りを甘受せざるを得ない。再度釈読を試み、訓み改めた点と、新たに明らかになった点を述べたい。まず、翻刻した本文とその訓読文を示せば、以下の通りである。

①竊以、法王出世、
〔隨機赴感〕
如水中月。

竊ひそかに以るに、法王の世に出でますは、機に随ひて感に赴き、物に應じて身を現すこと、水中の月の如し。

②是以、
〔託生王宮〕
〔遺形八斛〕
〔示滅雙樹〕
〔利益三千〕

是を以て、生を王宮に託し（王宮に託生し）、滅を双樹に示し（双樹に示滅し）、形を八斛に遺し（八斛に遺形し）、益を三千に利す（三千に利益す）。

③遂使
〔光曜五色〕
〔行遶七遍〕
神通變化、不可思議。

遂に光曜すること五色にして、行き遶ること七遍ならしめ、神通變化すること、不可思議ならしむ。

④我百濟王后佐平沙毛積徳女、
〔種善因於曠劫〕
〔受勝報於今生〕

我が百濟王后、佐平沙毛積徳の女は、善因を曠劫に種うゑ、勝報を今生に受く。

⑤〔撫育萬民〕 故能
〔棟梁三寶〕
〔謹捨淨財〕
〔造立伽藍〕

万民を撫育し、三宝を棟梁す。故に能く、謹んで淨財を捨て、伽藍を造立せり。

⑥以己亥年正月廿九日、奉迎舍利。

己亥639年正月廿九日を以て、舍利を奉迎す。

⑦願使
〔世世供養〕
〔劫劫無盡〕

願くは、世々供養して、劫劫尽くること無からしめ、

⑧用此善根、仰資闕字大王陛下、

此の善根を用て、仰ぎて大王陛下に資し、

⑨〔年壽與山岳齊固〕
〔寶曆共天地同久〕
〔上弘正法〕
〔下化蒼生〕

年壽は山岳と齊しく固く、宝曆は天地の共同むとともに久しく、上は正法を弘め、下は蒼生を化さむことを。

⑩又願、王后即身、
〔心同水鏡、照法界而恒明〕
〔身若金剛、等虚空而不滅〕

又願くは、王后即身にして、心は水鏡に同じく、法界を照らして恒に明く、身は金剛の若く、虚空に等しくして滅せず、

⑪七世久遠、並蒙福利、
〔凡是有心〕
〔俱成佛道〕

七世久遠、並びに福利を蒙り、凡おほそ是心有るもの、俱に仏道を成

せむことを。

①の「應物現身如水月中」は、前稿⁽¹⁰⁾では、『大正新脩大藏經』中、「大唐聖朝正信君子論」(『広弘明集』)及び『破邪論』(所引)のみに用いられることを指摘したが、「應物現形」の表現が存することを駒澤大学大学院生の渡邊幸江氏が確認した。今、「應物現形如水月中」を求め、初唐以前の用例を挙げれば以下の通りである。

- 1 北涼 經集部 曇無讖 金光明經(No.〇六六三)
- 344 b 佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。
- 2 隋 經集部 寶貴 合部金光明經(No.〇六六四)
- 385 b 佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。
- 3 隋 經疏部 智顛 灌頂金光明經玄義(No.一七八三)
- 005 a 佛眞法身。猶若虛空。應物現形如水月中。
- 4 隋 經疏部 智顛 妙法蓮華經玄義(No.一七一六)
- 745 b 文云。佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。
- 5 隋 經疏部 智顛 維摩經玄疏(No.一七七七)
- 545 c 經云。佛眞法身。由如虛空。應物現形如水月中。
- 6 隋 經疏部 吉藏 法華玄論(No.一七二〇)
- 437 b 故云。佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。
- 7 隋 經疏部 吉藏 法華義疏(No.一七二一)
- 603 b 故云。佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。

8 隋 經疏部 吉藏 勝鬘寶窟(No.一七四四)
012 c 又云。佛眞法身。猶若虛空。應物現形如水月中。
9 隋 論疏部 吉藏 中觀論疏(No.一八二四)
031 a 故佛眞法身猶如虛空。悟無生滅生滅即是本迹。故應物現形如水月中。

10・11 隋 論疏部 吉藏 大乘玄論(No.一八五三)
027 b 經云。佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中也。
045 c 故云。佛眞法身。猶如虛空。應物現形如水月中。
12 百濟 慧均 大乘四論玄義記 二一七頁

金光明經云、佛眞法身猶如虛空、應物現形如水月中也。以上のように、この表現は『金光明經』が基で、それを引用する形で継承されたように見受けられるが、とりわけ梁から初唐にかけて活動した智顛・吉藏に使用例が多く、さらには、吉藏の同門である先述の慧均『大乘四論玄義記』にも使用されることは注目される。前稿⁽¹⁰⁾で挙げたように、②「是以、託生王宮、示滅雙樹、遺形八斛、利益三千。」も、梁代の『経律異相』『釈迦譜』、及び智顛『維摩經略疏』、吉藏『法華玄論』など江南の仏教文献に類似表現を求められたことが思い合わせられる。

③は、石井公成氏のご教示により、舍利の奇跡を語ると見て、解釈を改めた。成る程、『広弘明集』巻第十七「仏

徳篇第三之三」や、『法苑珠林』巻第四十「舍利篇第三十七」感応縁を見れば、舍利放光の話がたくさん紹介されている。今、舍利が光を放つ例、光が繞る例、五色に輝く例を中心に挙げれば以下の通りである。

『広弘明集』

a 213 c 皇帝皇后於京師法界尼寺。造連基浮圖以報舊願。其下安置舍利。開皇十五年、季秋之夜有_二神光_一。自_レ基而上。右_二繞露盤_一。季秋の夜神光有り。基よりして上り、露盤を右に繞る。

b 214 c 華州於思覺寺起_レ塔。天時陰雪。舍利將_レ下日便朗照。有_二五色光氣_一。去_レ地數丈。状若_二相輪_一。正覆_二塔上_一。數十里外。遙望_レ之。則正赤上屬_レ天。舍利下訖雲霧復起。瑞雪飛散如_二天華_一。著_二人衣_一久之而不_レ濕。舍利將に下らんとすれば日便ち朗照す。五色の光氣有り。地を去ること數丈、状相輪の如し。正に塔上を覆ふ。數十里の外、遙かに之を望めば、則ち正に赤上して天に属す。

c 214 c 同州於大興國寺起塔。……十二月八日夜。有_二五色圓光_一。從_レ基而上遍_二照城内_一。明如_二晝日_一。五十里咸見_レ之。五色の円光有り。基從り上りて城内に遍照す。

d 218 b 趙州表云。舍利以_二三月四日_一到_レ州。臣等於_二治下文際寺_一安置起_レ塔。二日打_レ刹行道。舍利於_二塔所_一放_二赤光_一。從_レ未至_レ申更見_レ不同。或似_二像形_一。或似_二

樓閣_一。或見_二白光_一。乍大乍小。巡_二繞舍利_一。繞_レ瓶行道。或隱或顯。或遲或速。官人道俗莫_レ不_二觀見_一。驚慕號咽沸_二騰寺内_一。至_二四日_一又放_二赤光_一。曜如_二金色_一。縱橫一尺餘。紫綠相間。前後三度。良久乃滅。或いは白光を見、乍ち大、乍ち小、舍利を巡繞す。

e 218 c 冀州表云。舍利放_レ光。五色照_二滿城治_一。舍利光を放ち、五色城治に照り滿つ。

f 219 a 懷州表云。……八日至_二午前_一舍利欲_レ入_二塔函_一。遂放_二光於瓶外_一。巡迴數匝。暉彩照曜。或上或下。乍隱乍出。遂に光を瓶外に放ち、巡迴すること數匝。暉彩照曜す。或は上り、或は下り、乍は隠れ、乍は出づ。

『法苑珠林』

g 601 a 晋大興中。北人流_二播廣陵_一日有_二千數_一。有_下將_二舍利者_上。建_二立小寺_一立_レ刹。舍利放_レ光至_二于刹峯_一。感_二動遠近_一。舍利光を放ちて刹峯に至る。遠近を感動す。

『広弘明集』『法苑珠林』とも、この「金製舍利奉安記」に遅れるが、これらに引かれた舍利の奇跡が既に知られていたと考えて良いだろう。したがって、③は、舍利が放つ五色の光が、aのように塔の基壇から露盤までぐるぐるまわって上っていく様子、もしくはd fのように舍利瓶の廻りをぐるぐる回る様子を描写したと解釈したい。

④の「我々」という表現は、現代韓国語にも多用される「우리」という表現に通じるかも知れない。また、所謂「道後温湯碑文」にも「我法王大王」とあり、「法隆寺天寿国曼荼羅繡帳銘」にも「我大王与母王」「我大王所告、「世間虚假、唯佛是真」「謂我大王應生於天壽國之中」などと見える。所謂「推古朝遺文」に現れる用法と共通する。

⑨の「上弘正法、下化蒼生」は、石井公成氏の教示を受けるまで失念していたが、所謂「聖徳太子」の『維摩経義疏』に見える特徴的な表現である。これは『大正新脩大藏経』中、『維摩経義疏』にのみ用いられる。

ア仏国品021c

「從能師子吼」以下。第二廣嘆「自行外化」。就中即有六句。初四句廣「上外化」。後二句廣「上自行」。「能師子吼」者。爲衆說法無所怖畏。即義同「師子吼不畏衆狩」。「名聞十方」者。善行既滿「天下」。則有聽之類無不稱聞。此句似「嘆名」。而以「名聞證成師子吼德」。明下有「如是尊德」故。其名亦滿「十方」。此句上弘佛道。「衆人不請友而安之」者。菩薩慈悲不待物請。故言「不請」。教化衆生同證「極果」。故云「友而安之」。肇法師云。理接眞友不待請。護如慈母

之赴「嬰兒」。此句明「下化群生」。「紹隆三寶能使不絶」者。弘「通經教」。故法實不絶。必有「受行」。故僧寶不絶。依「教修」。善終成「種智」。故佛寶不絶。怙「上」能師子吼「廣」上王道通流。此句明「上弘佛道」。「降伏魔怨制諸外道」者。菩薩無「故現威欲伏」。但魔是邪見之主。今見「大土廣道」。即自然懷「恥」。故義言「伏制」。魔言「降伏」。外道稱「制者」。魔則審知「己非」。故起「惡心」。欲「破佛法」。故言「降伏」。外道者雖「求正道」。但悟執乖「宗」。故言「制」。此句明「下化蒼生」。

イ仏国品022b

「演法無畏猶師子吼」者。說法稱「機」。無「畏之失」。此句明「上弘佛道」。

ウ仏国品022c

「集衆法寶如海導師」者。明「開導群生」。共入「法海」。勸令「修善終得功德智慧之寶」。即義同導師將「諸商人」。共入「大海」。善教「採寶方法」。令「得」多利也。此句嘆「外化」。「了達諸法深妙之義」者。言「明達」。假有即空。此句明「能識藥」。「善知衆生往來所趣」者。往言過去。來言未來。所趣者。起病之所以。「及心所行」者。謂「善惡」。此二句明「能知起病之原也」。此皆嘆「自行」。然照「藥知病似乎外化」。但未「被」前人。故猶是自行。但私懷者。開導集「寶」。豈非「自能

識_レ藥知_レ病。豈非_レ益_レ他。若爾則應_レ言_三通兼_二自行外化_一。唯其別者。上句嘆_三上弘佛道慈心與樂_一。下句嘆_三下化蒼生悲心拔苦_一也。

工仏国品 027 a

菩薩上弘佛道下化蒼生故。取_三此報應_二上_一之心方成。

才方便品 030 a

「大願成就」者。謂_三上弘佛道下化蒼生願_一。

カ弟子品 033 c

「當_レ了_三衆生根有_二利鈍_一」者。呵_レ其不知_レ衆生病相。

「善於_三知見_二無_レ所_三罣礙_一」者。呵_レ其不知_レ爲_レ除藥。

此二句明不能_三下化蒼生_一。「以_三大悲心_二讚_三于大乘_一」

者。若機大者即應_三爲說_二大乘_一也。「念_下報_レ佛恩_一不_レ斷_三三寶_一」者。明_下若能稱_レ機爲說者。乃名_中念_レ報佛恩_一不_レ斷_三三寶之種_一也。而汝既違_三前機_二爲說_レ小乘_一。則

差_二乎佛意_一。豈言_下念_レ報_レ佛恩_一令_レ長_三三寶之種_一也。

此二句明不能_三上弘佛道_一。

キ弟子品 040 c

「度_三五道_一」者明_三下化蒼生_一。「淨_三五眼_一」者明_三上求佛道_一。

ク菩薩品 044 a

「菩提心是道場無_二錯謬_一」故_一者夫由_三直心_二則能發行_一。

由_レ發_三善行_一則心轉深心。深心變爲_三菩提心_一。何則上

弘佛道下化蒼生無_レ所_三錯謬_一。六度即兼_三自行外化_一。故皆是眞道之美場。

この表現は、白田淳三氏によれば、大乘菩薩道（自利利他の二行）を表す標語「上求菩提下化衆生」と同類の表現であり、「上求仏慧、下度群生」（大般涅槃經集解卷八・『大正新脩大藏經』三七卷四一三下）「上則求仏身、下則化物」（P2273「維摩詰義記卷第一」）などの類似表現も見えるといふ。

また、渡部孝順氏は「蒼生」の二字を問題にし、仏の大慈大悲に依る救済の相手を經典では「衆生」と記すが普通であり、時には「大衆」「群生」の言葉も用いられるが、「蒼生」という文字を使用した例を見た事がないと述べ、「蒼生」の使用例として『梁高僧伝』と『法華義記』を挙げているが、注目されるのは、法雲の『法華義記』の例である。今、『法華經』の本文とともに、この使用例を確認したい。

『法華義記』の当該箇所は、『妙法蓮華經』（No. 262）序品02cの「文殊師利導師何故……」から始まる最初の偈の以下の箇所についての注文である。

演說經典 微妙第一 其聲清淨 出柔軟音 教諸菩薩

無數億萬 梵音深妙 令人樂聞 各於世界 講說正

法 種種因緣 以無量喻 照明佛法 開悟衆生 若人

遭苦 厭老病死 爲説涅槃 盡諸苦際

法雲はこれを五分割し、以下のように述べる。

法華經義記 (No. 一七二五) 梁 經疏部 法雲 585 a

585 b

就六行半中自有五階。第一言「演説經典微妙第一」半偈。問言、何故令我聞佛説法出勝天魔外道表耶。第二「其聲清淨」一偈。問言、何故令我聞佛説法出群聖之外耶。第三「梵音深妙」一偈。問言、何故令我聞佛説法稱悅時衆之心耶。第四「種種因縁」一偈。問言、何故令我聞佛説法。能上弘佛道下濟衆生耶。初三句明上弘佛道。開悟衆生一句明下濟蒼生。第五「若人遭苦」下三行。問言、何故令我聞佛説法。……

最初に一偈全体の釈では「下濟衆生」と用いながら、「開悟衆生」一句の釈では「下濟蒼生」と用いている。即ち「照明佛法」は「上は仏道を弘む」を明かし、「開悟衆生」は「下は蒼生を濟ふ」を明かすのだと述べているのである。「衆生」を「蒼生」と換言したのは今のところ法雲が最初のものである。したがって、「金製舍利奉安記」と『維摩經義疏』に共通する「上弘正法、下化蒼生」という表現の淵源は、この法雲の『法華經義記』にありそうである。このことは、所謂「聖徳太子」の『法華經義疏』が、智顛や吉藏の依拠した二十八品本ではなく、法雲と同じ二

十七品本に依っていることからも首肯されるかも知れない。

前稿⁽¹⁰⁾と照らし合わせれば、弥勒寺「金製舍利奉安記」は、梁代仏教を基盤に、隋から初唐にかけての同時代の交流の中で書かれたと言うことができる。江南に学び、帰国した僧は慧均一人のみだったとは思われない。そうした仏教化の中で「金製舍利奉安記」は作製されたと考えられる。

五 百濟から我が国へ

百濟からの渡來僧と言えば、まず慧聰が浮かぶが、今日その著作(逸文)が残るとなると道藏が挙げられる。『日本書紀』の記述からすれば、天武朝(天武十二683年七月)には既に渡來していたことになる。

是月。始至^三八月^一早之。百濟僧道藏、^{あまほひ}零之得^レ雨。

右のように、六八三年に雨乞いに成功したとあり、持續二688年七月にも同様の記事がある。

秋七月丁巳朔^{十一日}丁卯。大雩。旱也。丙子^{二十日}、命^三百濟沙門道藏^{あまほひ}。請^{あまほひ}雨。不^{あまほひ}崇^{あまほひ}。朝。遍雨^{あまほひ}三天下^一。

また、『続日本紀』養老五721年六月廿三日の詔からは、以下のように、我が国仏教界の中心的存在であったことが知られる。

又百濟沙門道藏。寔惟法門領袖。釋道棟梁。年逾^三八十一。氣力衰耄。非^三有^三束帛之施^一。豈稱^三養老之情^一哉。宜^三

所司四時施^レ物。施五疋。綿十屯。布廿端。又老師所
生同籍親族。給^レ復終^二僧身^一焉。

この道藏が『成実論疏』を著したことは、以下に認めら
れる。

『三国仏法伝通縁起』昔百済道藏法師造^二成実論疏^一、
有^二二十六卷^一、上古伝来于^レ今有^レ之。

先年、この『成実論疏』逸文を収集し、考察を施した画
期的な論文があった。金天鶴氏の「百済道藏の『成実論
疏』の逸文について」⁽¹⁶⁾がそれである。ここでは、紹介に留
めるが、古代半島と我が国に共通する文末の「之」の用法⁽¹⁷⁾
が見られるという指摘も含まれる。

江南に学び百済に帰国した慧均、百済から渡来し奈良時
代の日本仏教界に中心的役割を果たした道藏、この二人の
僧が象徴する流れの中で、百済仏教を、上代の仏教を、ひ
いては仏教と上代文学を捉えていくことが必要であろう。
近年相次いだ百済仏教関係文字資料の発見は、またさらな
る新資料の発見を予感させてくれる。

注

1 森博達「『日本書紀』—その典拠(資料) 研究の方法と
実際—」『古代 韓日』言語文化比較研究(서울大學校

- 奎章閣韓國學研究院、二〇〇八年)、また『往五天竺國
伝』のテキストは、中外交通史籍叢刊『往五天竺國傳箋釋
經行記箋注』(中華書局、二〇〇〇年)参照。この問題に
ついては、かつて拙稿「漢字で書かれたことば—訓読的思
惟をめぐって—」(国語と国文学平成十一年五月特集号)
で指摘したように、在唐経験もある当代有数の知識人伊吉
連博徳も、日本書紀が引く伊吉連博徳書において単純な
「有^二在^一」の誤用を犯していることが思い合わせられる。
- 2 『百済木簡』(国立扶余博物館、二〇〇八年二月)
- 3 『咸安城山城木簡』(早稲田大学朝鮮文化研究所・国立
伽耶文化財研究所、二〇〇九年六月)
- 4 『韓國の古代木簡二〇〇四』(国立昌原文化財研究所、
二〇〇四年七月)、『韓國の古代木簡二〇〇六』(国立昌原文
化財研究所、二〇〇六年七月)
- 5 『나무속 암호 목간』(拙訳・木の中の暗号木簡) (国立
扶余博物館・国立伽耶文化財研究所、二〇〇九年五月)
- 6 乾善彦「国訓『宛(あてる)』の成立をめぐる—誤用
が国訓となる一つの場合—」国語学一四七集、一九八六年
一二月
- 7 윤선대 『목간이 들려주는 백제 이야기』(拙訳・木簡が聞
かせてくれる百済の話) (우유성、二〇〇七年) 一四六頁
- 8 校勘『大乘四論玄義記』崔鉉植校注(金剛大学校仏教文
化研究所、二〇〇九年六月) 三七頁上(初出) 崔鉉植『大
乘四論玄義記』百済撰述説再論『韓国史研究一三八、二〇
〇七年九月

9 崔鉉植氏は、「寶慧寺」以外にも、未開社会の例として「耽羅」（済州島）を挙げるのが百濟人の知識に依拠すること、「呉魯」の用語が、中国の江南地方あるいは南朝の国家を示す呉国および江北地方あるいは北朝国家を示す魯国の意に用いられることなど百濟撰述説の根拠を挙げている。また、石井公成氏によれば、『大乘四論玄義記』「成壞義」逸文に見える「又在者」の用法は、漢文では「又有者」とはあるべきで、変則漢文であると言う。

この百濟撰述説に対して、伊藤隆寿氏は新羅撰述説を採られている。『大乘四論玄義記』に関する諸問題」駒澤大学仏教学論集四〇、二〇〇九年一月

10 拙稿「百濟弥勒寺『金製舍利奉安記』」『青木周平先生追悼古代文芸論叢』(二〇〇九年一月)

11 「우리」は日本語の「我々の」よりも使用範囲が広く、自分とその構成員である場合には「내」(私の)ではなく「우리」(我々の)を用いる。例えば、「우리 집」(我が家)・「우리 회사」(私の会社)・「우리 아버지」(私の父)・「우리 나라」(我が国)などのように多用される。

12 推古遺文については、拙稿「推古朝遺文の再検討」『聖徳太子の真実』(平凡社、二〇〇三年)参照。

13 白田淳三「維摩経義疏における『上弘仏道・下化蒼生』について」『印度学仏教学研究通号四二』(二一―二二)、一九七三年三月

14 渡部孝順「維摩経義疏の『上弘仏道下化蒼生』の一句について」『聖徳太子研究六』一九七一年一月

15 田村晃祐「飛鳥時代の仏教と百濟・高句麗の僧」金剛大
学校『불교학라뷰』(仏教学研究レビュー)二〇〇八年(vol.
4)二〇〇八年二月

16 金天鶴「百濟道蔵の『成実論疏』の逸文について」金剛
大 학교『불교학라뷰』(仏教学研究レビュー)二〇〇八年(vol.
4)二〇〇八年二月

17 拙稿「上代漢文訓読の一端―文末の『之』をめぐる―」
季刊悠久八六二〇〇一年七月

本稿における『大正新脩大藏経』の引用形式は慣例(頁・a
上段、b中段、c下段を示す)に拠った。また、陵山里寺址遺
跡・王興寺址・国立扶余博物館蔵の木簡等、扶余の遺跡・遺物
の見学については、同博物館の李鎰賢氏の案内に拠るところが
大きい。本稿を成すに当たり、駒澤大学の石井公成氏に多大な
ご教示を賜った。

折しも初校の最中に、有働智英氏より「益山弥勒寺出土『金
製舍利奉安記』について」(注釋史と考證創刊号)・「6世紀の
百濟における舍利信仰」(朝鮮奨学会学術論文集二七)の二篇
を賜ったことを付記する。